

磨光了的金币

北基行 記

北京市 国家博物館 殷代の鼎「后母戊鼎」
世界最大の青銅器 830kg

磨き上げた金貨

子供たちは『クイロフ寓話』が好きだ。このロシア十九世紀初頭の作家は、冗談とも、真面目ともとれる形式の、それは“立派なお説教”で、“神聖なる真理”をたくさん証明している。

その彼の寓話に、『ルーブル金貨』というのがある。単純な頭の農夫が、畑で土まみれのルーブル金貨を拾った。ある人が三握りの五分硬貨と交換しようと持ち掛けた。農夫は考えた、金びかに研いたら、この倍は出す奴が現れるだろう、と。そこで、その金貨をびかびかに磨き上げた。すると、びかびかのルーブルは、その価値がもとの値段よりも下がってしまった。

クイロフのこの寓話の意味する所は大変明確である。彼の云わんとすることは、我々が受ける教育であるが、それを受ける人は、“善良なる本質を外面とともに失ってはならない、彼らの靈魂を弱めてはならない、彼らの性格を損なってはならない、質朴を喪失してはならない、虚ろな表面的光彩のために、光榮を代替に不光榮を招いてはならない”と警告しているのだと説明する。この寓話の意義は、単にクイロフが云う範囲にとどまらなかった。

レーニンは『何が“人民の友”か』という著作の中で、クイロフの寓話を引用して、ロシアの民粹派（ナロードニキ）のミハイロフスキーを風刺して、彼がマルクス学説を磨き上げて金貨のように仕立て上げた企てを暴いた。クイロフの寓話は、レーニンの手中で、理論闘争の武器と化し、マルクス主義を防衛する武器となった。

ミハイロフスキーのように、マルクス学説を金びかに磨き上げることに努めた人々は、世界各地に残存しており、根絶には至らない。この種の人々は、ミハイロフスキーと同じように、資産階級や富農の利益を代表しながら、階級闘争は既に存在しないと鼓吹して、階級調和の理論を使って階級闘争の学説に置き換えようとするものである。彼ら自身が気づいていないに拘わらず、実際には、空想社会主義者の主観社会学を、マルクス主義と置き換えようとしているのだ。彼らが特に強調するのは、生産手段（資本財）の平均的分配であり、これを無限に小生産まで発展させ、遂には、社会の分業を減少させて、経済上、政治上において出来るだけ資産階級の民主的権利を残存させようとするものである。

若しもこれらの民粹派の見方が事実となれば、マルクス主義理論はもとの価値を失い、本質が磨き上げられるに違いない。こんなことが許されてよいだろうか？レーニンの答は、容認ならんとし、決然とこれに向かって闘争にのぞみ、真のマルクス主義者の見本となった。

しかし、この一幕は、クイロフが寓話を書いた頃には夢想だにできなかった出来事であった。いまとなれば、この寓話は我々の思想教育に役立つばかりか、理論闘争のうえにも実際の意義を有しており、我々の日常生活のもろもろの出来事に対する接し方にも普遍的な意義があることを教えてくれた。金貨を磨く行為は、いたる方面で見かける。ミハイロフスキーのように、裏に目的を持つ人以外に、多くの無垢の人が、知識が無く、経験も無ければ、真の好意から出ても、却ってこのような愚を犯すこともありえる。

魯迅が曾てあるグループの人を風刺して、古代銅器の錆緑色を磨き上げ、自分は賢いことをしたと得意気であったが、骨董の価値を台無しにしたと書いた。これは、磨き上げた金びかの金貨とそっくりである。我々の生活の中でまだ多くの似通った愚をしでかしているだろう。寓話の如き例は、現在ではもう起こり得ないと思うけれど、こんなことは絶対に起こらないと誰も証明することが出来ない。そこまでにして、類似の例を一々挙げることは、ご遠慮いたしましょう。

“磨き上げた金貨”に似た話は、ありふれた問題で、眼をこらせばそこらまわりに存在する。ひっかからないように注意しないと危険だ。

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

『磨光了的金币』ひとそえ

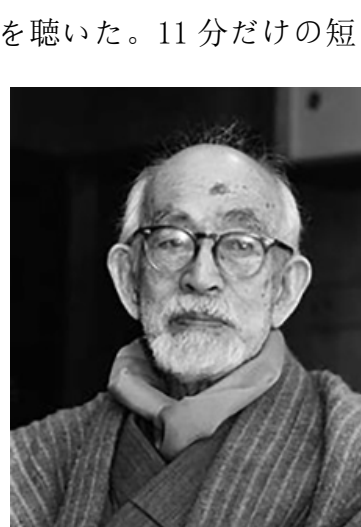
子供のように寓話を読もうとしてみたものの、そのまま読み流してよいのだろうか？レーニンの批評もそのまま受けとめてよいのだろうか？と思った。しかし、今回は下手な深読みはせずに別方向へ。

志賀直哉の『清兵衛と瓢箪』を思い出し、青空文庫で朗読を聴いた。11分だけの短編だった。12歳の清兵衛が10銭で手に入れた瓢箪を磨いて、磨いて、磨き込んでいるところを教師に見つかり取り上げられた。修身の授業中だった。粘着質の教師は清兵衛の家まで押しかけ、母親を泣かせ父親を怒らせた。けったくその悪い瓢箪は小使にやってしまった。その後、小使は骨董屋に瓢箪を持ち込み、4ヶ月の給料分の金を手に入れて人知れずほくそ笑んだ。骨董屋が富豪に一桁違いの大金で清兵衛の瓢箪を売ったことを誰も知らない。

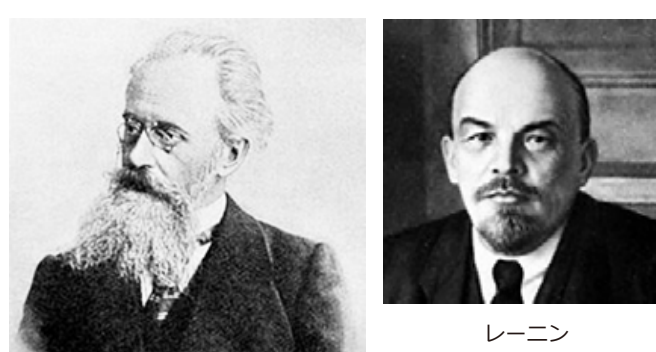
ロシアの寓話よりずっと奥深い小説であることを改めて感じた。

金貨や瓢箪を磨く話ではなく、最近、法善寺の水掛け不動像の苔が削り取られて事件になった。多くの人が、長い間に水を掛けながら、願を掛けてきて石像に苔がかぶさっていた。素顔が見えてしまったので法善寺住職も怒った。「きれいにしたいくて、すみません」と削り取った人が出頭してきた。法善寺さんは水に流したらしい。

井上邦久



志賀直哉



レーニン

ニコライ・ミハイロフスキー

磨光了的金币 原文

我们的许多孩子都喜欢看《克雷诺夫寓言》，因为这位十九世纪初期的俄罗斯作家，用了他自己认为是“半说半笑”的寓言形式，代替了“一本正经的说教”，证实了许多“神圣的真理”。

在他的寓言中，有一篇题目是《金卢布》。它描写一个头脑简单的农夫，在地里捡到一个金卢布，上面沾满了尘土；有人拿三把五分的硬幣，想来换他的金卢布。农夫心里想，如果把金币磨光了，也许将来人家还会出双倍的价钱。于是，这个农夫用砂石和砖头，把金卢布磨得光光亮亮的，然而，他没想到这个磨光了的金卢布却已失去了原来的价值。

克雷诺夫说这个寓言的意思是非常明显的，他自己认为这是要说明我们的教育，不应该使受教育的人们“善良的本质连同外衣一起丧失了，不要削弱他们的灵魂，不要损害他们的性格，不要使他们失去质朴单纯，仅仅给了他们虚有其表的光彩，给他们招致不光荣来代替光荣”。但是，实际上这个寓言的意义还不只是克雷诺夫自己所说的这些。

列宁在《什么是“人民之友”》这一部著作中，曾经引用了克雷诺夫的这个寓言，讽刺了俄国民粹派理论家米海洛夫斯基，揭穿他要把马克思学说变成磨光了的金币的那种企图。列宁实际上已经把克雷诺夫寓言的含义，进一步发展和丰富起来了。克雷诺夫的寓言，在列宁的手上，已经成为进行理论斗争的一种武器，成为捍卫马克思主义的一种武器了。

象米海洛夫斯基那样，力图使马克思学说变成磨光了的金币的一些人，在世界上还远没有绝迹，也不会绝迹。这种人，如同米海洛夫斯基一样，实际上是代表了资产阶级和富农的利益，极力吹嘘阶级斗争已经不存在，而要用阶级调和的理论去代替阶级斗争的学说。他们无论自己是否认识得到，实际上都希望把空想社会主义者的主观社会学，来代替马克思主义。他们特别强调要把生产资料平均分配，无限制地发展小生产，减少社会分工，在经济上、政治上尽量保存资产阶级的民主。

如果这些民粹派的观点变成了事实的话，那末，马克思主义的理论就丧失了它的原有意义和价值，它的本质特点就将完全被磨掉了。这难道是可以容忍的吗？列宁的回答是不能容忍，因而他坚决地起来进行斗争，给后来真正的马克思主义者做出了榜样。

但是，这一切却完全超出了克雷诺夫在写作这个寓言的时候最深广的意料之外。现在看来，这个寓言不但对于我们的思想工作有意义，不但对于我们的理论斗争具有实际的意义，而且对于人们在日常生活中对待一切事物的态度都有普遍的意义。事实证明，磨光金币的行为在各方面都有。除了象米海洛夫斯基那样别有用心的人以外，还有许多人是因为缺乏知识，没有经验，甚至于有的自以为是出于一番好意，而做了这类愚蠢的事情。

鲁迅也曾经讽刺过一种人，把古代铜器上绿色的铜锈磨掉，自以为很好看，结果却把古物毁坏了。这和磨光金币的故事几乎是一模一样的。我们从生活的经验中还可以举出许许多多类似的例子。也许这种例子现在是绝无仅有的，然而，谁能证明这类事情已经完全不存在了呢？这类例子恕我不一一列举了。

我们应该承认，“磨光了的金币”是到处可以发现的，因此，必须随时注意加以鉴别，千万不要上当。